

- *10 設定濃度が2濃度区と少なく、幅のある毒性値のため PNEC 導出の根拠として用いない
- *11 試葉純度不明
- *12 試験は止水式で4日間実施され、かつ被験物質濃度の測定が行われていないため、PNEC 導出の根拠として用いない
- *13 被験物質のストック溶液調製時に濁りがみられ、かつ被験物質濃度の測定が行われていないため、PNEC 導出の根拠として用いない

信頼性が認められた知見のうち、生物群ごとに急性毒性値及び慢性毒性値のそれぞれについて最も小さい毒性値を予測無影響濃度（PNEC）導出のために採用した。その知見の概要は以下のとおりである。

1) 藻類

Boudreau ら⁴⁾⁻²⁰⁰⁷⁰⁶⁸は米国 ASTM の試験方法（Designation E 1218-97a、1999）及び Geis ら（2000）の試験方法に準拠し、緑藻類 *Pseudokirchneriella subcapitata* の生長阻害試験を実施した。試験は2回以上行われ、被験物質として PFOS カリウム塩（ $C_8F_{17}SO_3K$ ）が用いられた。設定試験濃度は0、28、56、113、225、450 mg/L（公比2）及び0、12.5、25、50、100、200、400 mg/L（公比2）であった。毒性値の算出には設定濃度が用いられた。96時間半数影響濃度（ EC_{50} ）は48,200 $\mu g/L$ 、96時間無影響濃度（NOEC）は5,300 $\mu g/L$ であった。

2) 甲殻類

3M 社⁵⁾⁻⁷は米国 EPA の試験法（OPPTS 850.1035）に準拠し、アミ科 *Americamysis bahia* の急性毒性試験を GLP 試験として実施した。試験は止水式で行われ、被験物質として PFOS カリウム塩（ $C_8F_{17}SO_3K$ ）が用いられた。試験用水には塩分濃度を20%に調整したろ過天然海水が使用され、設定試験濃度区は0、1.1、1.8、3.0、4.9、8.2 mg/L（公比約1.6）であり、被験物質の実測濃度の平均は0.115未満、0.57、1.1、1.9、3.0、5.4 mg/Lであった。実測濃度（算術平均値）に基づく96時間半数致死濃度（ LC_{50} ）は3,340 $\mu g/L$ （ペルフルオロオクタンスルホン酸当りに換算）であった。

また、3M 社⁵⁾⁻¹⁰は米国 EPA の試験法（OPPTS 850.1350）に準拠し、アミ科 *Americamysis bahia* のライフサイクル毒性試験を GLP 試験として実施した。試験は流水式（換水率約11回/24時間）で行われ、被験物質として PFOS カリウム塩（ $C_8F_{17}SO_3K$ ）が用いられた。試験用水には塩分濃度を20%に調整したろ過天然海水が使用され、設定試験濃度区は0、0.086、0.17、0.34、0.69、1.4、2.7 mg/L（公比約2）であった。被験物質の実測濃度の平均は0.0458未満、0.057、0.12、0.25、0.55、1.3、2.6 mg/Lであった。繁殖阻害に関する35日間無影響濃度（NOEC）は、実測濃度（算術平均値）に基づき232 $\mu g/L$ （ペルフルオロオクタンスルホン酸当りに換算）であった。

なお、淡水産のオオミジンコ *Daphnia magna* に関する急性毒性値、慢性毒性値は、それぞれ遊泳阻害に関する48時間半数影響濃度（ EC_{50} ）56,600 $\mu g/L$ （ペルフルオロオクタンスルホン酸当りに換算）、繁殖阻害に関する21日間無影響濃度（NOEC）11,100 $\mu g/L$ （ペルフルオロオクタンスルホン酸当りに換算）という報告がある。

3) 魚類

3M 社⁵⁾⁻¹は OECD テストガイドライン No.203(1992)、米国 EPA の試験法（OPPTS 850.1075）に準拠し、ファットヘッドミノール *Pimephales promelas* の急性毒性試験を GLP 試験として実施